

「温泉マーク」由来記

馬場町（会員） 外山 健一

はしがき

私は、日本一の温泉地を自負する別府国際観光温泉文化都市に住んでいる。だが、地図で温泉地を表す「温泉マーク」を誰が考案し、日本でいつ頃から使用したのか。図形としての温泉記号の変遷はどうであったか。また、別府観光の先覚者「油屋熊八翁」の考案である等々、諸説は紛々。果たして考案者が誰であったのかさえ、今日まで特定されていないというのが実情である。

そこで、一人の土木技術者として、専門的な視点から「地形図記号」の一つである温泉記号の誕生を解明してみることにした。

一 地形図記号のデザイン

日本で最初の科学的に正確な地図は、伊能忠敬（一七四五—一八一八年）の地図である。

その後、明治になって、本格的に詳細かつ正確な全国の地図が作られるはじめた。日本でも、軍部が軍事目的から正確で詳細な地図を作ることとなったのであるが、当時陸地の地図は陸軍の所管であった。

また、二万分の一の「迅速図」じんそくず（急いで作ったためか多少不正確、明治一六年）が作られたこともあった。そのうち「陸軍参謀本部陸地測量部」が設置され、全国的に統一した形式の五・万・分・の・一・の・地・形・図が作られた。

この陸軍参謀本部陸地測量部は第二次大戦後、陸軍から建設省へと移管され、さらに「建設省地理調査所」となり、のちに現在の「建設省国土地理院」の所管となったのである。

地形図の記号のデザインとしては、古くから「記号は一見してその現物が連想されること。かつ、描きやすく印刷が容易であること」を基調にして考案されてきたという経緯が知られる。

さて、地形図記号制定の主眼とするところは

- ① 明確に物体の種別を判定し得るもの
- ② 意匠が美術的で地図に美観を添えるもの
- ③ 簡潔にしてしかも要を得、描画が容易であること

を理想とした。現行基本地形図の諸記号は「陸軍参謀本部陸地測量部」以来、数十年に亘って使用されてきた。その中で、主要なものを次に記載してみよう。

二 地形図記号の起こり

- ㄇ…寺院Ⅱ仏教のシンボルマーク（梵字「マンジ」より）
- 文…学校Ⅱ「文」の字形
- △…裁判所Ⅱ高札の略形
- ◇…税務署Ⅱそろばん（算盤）の一部
- …官公庁Ⅱ篆書（漢字の一体）の「公」の図案化
- ┘…測候所Ⅱ風速計の略形
- ┘…消防署Ⅱ消防用器具の刺股
- ⊙…工場Ⅱ機械の歯車の一部
- ⋯…茶畑Ⅱ茶の実の抽象化
- 〒…郵便局Ⅱ逓信省の「テ」の図案化
- Ⓚ…銀行Ⅱ昔の金庫の小判の「投入口」を形どる
- ⊗…警察署Ⅱ「六尺棒」（明治当初の警棒）の交差を丸で囲む
- ⊕…保健所Ⅱ赤十字を丸で囲む
- 卍…神社Ⅱ鳥居の形状
- ⌒…墓地Ⅱ墓石の側面形

三 温泉マークの発祥地

群馬県安中市（もと井伊家、のち板倉家の城下町）近郊の磯部温泉が「温泉マーク」発祥の地とされている。

万治四年（一六六一）、今から約三四〇年前の三月

二十五日、農民の土地争いに決着を付けるため、評決文「上野国碓氷郡上磯部村と中野谷村就野論裁断之覚」が江戸幕府から出された。その添付図には、磯部温泉と記した「温泉マーク」が二つ描かれている。専門家が調査した結果、この「温泉マーク」が日本で使われた最古のものであると判明した。地図の温泉記号は、温泉が流れる泉から「ゆげ（湯気）」があがっている様子を具象化している。

これこそ温泉記号の日本最古のものだということ、磯部温泉近くの赤城神社にその「記念碑」が建立された。また、磯部温泉の旅館「長寿館」前にも温泉記号発祥の碑が建てられている（稿末 写真参照）。

四 温泉マークの歴史

温泉マークは本来、天然温泉を示す「地形図記号」なのだ。以前から温泉の看板や案内記、手拭いの図案などにも使われ、観光温泉地のシンボルマークとなった。

しかし、戦後は全国の温泉旅館や町の銭湯、昨今は連れ込みホテルの看板まで、夜の都会に誘惑的なネオンとなって輝いている。

この「温泉記号」が制定されるまでには、明治時代に三十年の歴史を持っている。建設省地理調査所（後の国土地理院）に奉職三十数年の高木菊三郎氏の研究によれば、もつ

とも古い記号は明治十二年内務省地理局測量課で制定された
▲図が「事のはじまり」純日本風の箱ぶろ（風呂）から湯
気の立っている有様を具象化した。

明治十八年以降、地質調査所作成の地質図では温泉が▲、冷
泉が△として示され、地形図では温泉浴場が▲図記号で示さ
れていた。これは欧州式の浴槽にシャワーを記号化したもの
で、さしずめ「文明開化の風潮の所産」というところであろう。

一方、旧陸軍は、軍用地図に同年噴泉記号として㉞のマー
クを用い、噴出口から噴出する鉱泉を示した。しかし、同
十八年に、日本独自の天然鉱泉が湯つぼから噴き出す様子
を㉞図で現し、ついで同二十四年㉞図（注：三本の湯気の
長さ形が同じ）の記号に変わり、さらに明治二十八年以後
四十一年まで、㉞図（注：三本の湯気の形が左から右に少
しずつ下がり三本目が噴出口につく）になって、鉱泉一般の
記号となった。（稿末 写真参照）

昭和十四年、ドイツのカールスルーエ市温泉協会長が来日した
とき、これこそ「世界名記号」と絶賛した、と伝えられている。

ほかの「地形図記号」は、世界共通のものが多いのに、こ
のマークだけは日本独特のもの。「子孫に誇るべき貴重な文
化遺産」として、今やその文化（？）が巷に氾濫している
というわけである。

五 温泉記号の変遷

- △ 江戸近郊図 嘉永三年
- 銅版大日本精図 慶応三年
- 近畿全図 明治九年
- 測絵図譜 明治十一年
- 迅速図式 明治十六年
- 仮製図式 明治十八年
- 輯製二十万文之一図図式 明治二十年
- 明治二十四年式 明治二十四年
- 明治二十八年式 明治二十八年
- 昭和三十年式 昭和三十年
- 現在使用のもの

六 油屋熊八と温泉マーク

今日まで、油屋熊八翁に関する伝記・小説をはじめ、温
泉観光の図書類が実に二十八冊ほど出版されている。そのう
ち、十一冊に「油屋熊八翁と温泉マーク」のことが記述され、
その内のほとんどが「温泉マークは油屋熊八翁の考案したも
のである」旨、記述する。その文面要旨は、およそ次の三
点にまとめられよう。

- ① 「今では日本地図に温泉地のマークとして使われてい

る、あのデザインは油屋熊八翁が考案したものだ」
 ② 「マークの作者は熊八翁でなく、別人という説もある」
 ③ 「今ではおなじみの温泉マークを考案したのも油屋熊八翁のようにいわれているが、これは定かではない。しかし、油屋熊八翁が別府の宣伝に好んで温泉マークを使つたのは疑いのない事実だ」

これを要するに、温泉マークの登場したのが嘉永三年（一八五〇）、江戸近郊関八州北陸国が始まりで、今日の温泉マークの原形は明治十八年（一八八五）「仮製図式」からであると言つてもよいのではあるまいか。

油屋熊八翁が別府に定住したのが明治四十四年十月一日。昭和十年三月二十七日に没していることを考慮すると、「油屋熊八翁の考案」とするには年代が符合しない点が残念である。

あとがき

これまでの調べで判明した点は、温泉マークの発祥の地が群馬県安中市の磯部温泉であること。現在使用されている温泉マークの原形は、明治十八年に日本の近代的な地図を作ろうと考えた内務省地理局が考案したもので「仮製図式」から使用されたこと。温泉マークは世界に類がなく日本独特のもので、昭和十四年にドイツのカールスルーエ市温泉協会会長が来日し世界名記号と絶賛したことである。

建設省地理調査所（後の国土地理院）に奉職三十数年の高木菊三郎氏（明治二十一年生れ、昭和三十年退職）はすでに鬼籍に入られ、直接お話を聞けないのが非常に残念である。今回の調査にあたり群馬県安中市商工課職員、別府市亀の井ホテル・亀の井自動車株式会社、長野県諏訪郷土史文化協会、南信日日新聞社の方々をはじめ多くの方から、資料と情報の提供をこころよく戴きましたことに對して深く感謝の意を表します。

（参考文献）

- 『陸地測量部沿革誌』
「陸地測量部」
- 『地図百年史』
「国土地理院著」
- 『地形図図式の手引き』
「日本国際地図学会著」
- 『地形図図式』
「国土地理院著」
- 『オール諏訪』
「横内東洋著」



赤城神社の境内の記念碑



評決文添付の絵図面